

三条凧合戦情報誌

イカマガジン

2026 年号
Take Free



SANJO IKAGASSEN

三條 凧合戦

空気を読むな 風を読め。

六角巻凧発祥之地・新潟県指定無形民俗文化財

2026
6/6(土) 7(日)
三條防災ステーション(ミズベリング三條)

1日目
2日目

9:00~16:00 合戦(1日目)※雨天中止
9:00~10:15 開会式・夢の大凧上げ
(復興支援イベント)
10:20~12:00 イベント(凧ばやし演奏・
よさこいなど)
13:00~16:00 合戦(2日目)※雨天中止

凧マルシェ
合戦両日同時開催!
飲食、雑貨など
25店 出店予定
OPEN 10:00
CLOSE 15:00



三條風協会

主催:三條風協会 共催:三條市 協賛:三條観光協会

後援:三條商工会議所 三條新聞社 新潟日報社 BSN 新潟放送 UX 新潟テレビ21 NCT ケンオードットコム 一般社団法人三條青年会議所 ※雨天中止



株式会社 高儀



株式会社 ラモ工業



きれいな地球で暮らしたい。

TOYAMA GROUP | 外山産業グループ

【三条凧合戦】とは

その昔、村上藩の陣屋が三条に設置されたことを記念して、端午の節句に町をあげての凧揚げ祭りが行われるようになりました。

初めのうちは、ただの凧揚げ祭りでした。陣屋の子供たちの揚げている凧に鍛冶屋の子供たちが川の対岸から六角形の凧を揚げ、空中で絡めて落としたことが起源となり大人たちも夢中になる凧合戦へと変化していきました。

元禄五年から三百数十年続いてきた三条凧合戦は、三条発祥の六角巻凧を使用し、約三十組の凧組が二日間空中で糸を絡め、落とし合い技術を競う合戦です。

揚げ師たちが凧を空中で自在に操る妙技は、全国でも他を寄せつけない技術だといわれています。

【イカマガジン】とは

三条凧合戦の魅力やそれに関わる様々な人たちへのインタビューを通し、伝統がいかに継承されていくのかを綴った情報誌です。

三条凧合戦を代表する魅力的な立役者の人となりにより焦点をあて、これから三条凧合戦の伝統を継いでいく子供達への未来に向けた手紙として三条凧協会・企画広報部が企画・制作しています。

イカマガジン 2026年号

02 次世代へつなぐ凧合戦 IKAGASSEN NEXT開催

05 一ノ木戸小学校が凧揚げクラブを創部

08 名人揚げ師に今聞いておきたい
謙信組 長谷川 潔

10 三条市合併二十周年記念インタビュー
下田村羚羊会

12 凧合戦を世界へ 海外事業で広がる伝統文化の可能性

15 令和8年度 三条凧協会 協賛企業

17 編集後記



次世代へつなぐ 風合戦 IKAGASSEN NEXT 開催

三条市で開催されている伝統行事「三条風合戦」。その文化を次世代へつなぐ新たな取り組みとして始まったのが「IKAGASSEN NEXT」だ。三条風協会が主催し、15歳以下の子どもたちを対象に風合戦を体験してもらうことを目的としている。長い歴史を持つこの地域の誇りともいえる行事を、未来へ確実につないでいくための挑戦でもある。

三条風協会ではこれまでも、地域学習の一環として年間10校以上の三条市内の小学校を訪問し、「三条六角巻風」の風揚げ体験を実施してきた。子どもたちは風揚げそのものを楽しんでくれるが、三条の風文化の本質は「合戦」にある。糸を絡ませて相手の風を落とす迫力ある競技こそが、三条風合戦の醍醐味であり、単なる遊びではなく高度な技術と駆け引きが求められる伝統文化だ。

しかし、本戦である三条風合戦の出

場資格は16歳以上。風揚げの体験はできても、子どもたちが実際に「合戦」を体験する機会は、今までほとんどなかった。風揚げの楽しさを知ってくれた子どもたちに、その先にある本当の魅力を伝えられないことへのもどかしさがあった。そんな思いから生まれたのが「IKAGASSEN NEXT」だ。

「NEXT」への 想い

「子供風合戦」という名前ではなく「IKAGASSEN NEXT」と名付けたのにも理由があった。対象年齢は15歳まで。本戦の出場資格である16歳のすぐ下の世代を対象にすることで、子どもたちがそのまま三条風合戦の本戦へと参加する流れを作りたいという願いが込められている。中学生までを対象にしているのに「こども」という表現に違和感があり、次の世代という意味の「NEXT」という名称に決定した。つまり、未来の風合戦の担い手を育てるためのアンダー15歳大会ということだ。

2024年から開催を計画していたが雨天で中止を余儀なくされ、2025年は満を辞しての開催となった。参

加者は約50人。想定を上回る人数が集まり、凧協会関係者にとっても嬉しい驚きとなった。イベント当日、直前まで凧ばやしの演奏で来場してくれた裏館小学校児童の飛び込み参加もあり、さらに賑やかな大会となった。会場には子どもたちの笑顔と期待があふれ、開催前から熱気に包まれていた。

面白さだけでなく悔しさも

大会では5チームに分かれて対戦を行った。当初は人数をできるだけ均等に分ける予定だったが、申し込みの段階で友達同士のグループや同じ学校からの参加が多かったことから、最終的には学校単位のチーム編成とした。これは将来的に「学園対抗凧合戦」のような形へ発展させたいという思いからだ。そのため、学校によってチームの人数に多少ばらつきが生まれたが、それも含めて学校ごとの一体感が生まれる大会となった。

チーム名は子ども達が自身で考え、合戦前には協会役員がインタビューに回ると「絶対勝つぞー」と意気込む子ども達が多く、すでに勝負への熱量は

本番さながらだった。

早朝まで雨が降っていたため会場の土は濡れていたが、子ども達はそんなことお構いなし。靴やズボンを泥だらけにしながらか会場を縦横無尽に走り回っていた。

実際の凧合戦では、糸が絡み合うたびに歓声が上がリ、先輩揚げ師たちからのサポートを受けながら必死に相手の凧に糸を絡め、勝負を挑む。その様子は本番の合戦さながらで、会場の空気は一気に真剣勝負の場へと変わった。

相手の糸を切る時、走れ！と言われた時には大人顔負けのスピードと体力で何度も会場を走り回る。凧が切れ相手の凧が落ちると会場は大きな盛り上がりを見せ、歓声と拍手が響き渡った。

子ども達に話を聞くと「想像より難しかったけど、次はもっと上手に揚げたいから練習したい」、「負けて悔しいから次はもっと点数取れるように頑張る」と、凧揚げとはまた違う、駆け引きと凧合戦の競技としての面白さに子どもたちも夢中になっていた。面白さだけでなく悔しさも感じ、次回の大会に改善点や熱意を見せる子どもたちの姿は、これからの凧合戦を担う揚げ師の顔つきだった。実際の「合戦」の経



験を通じて揚げ師として一歩成長した様子がかがえた。

次世代への確かな手応え

今回の開催について、凧協会としての手応えも大きい。大会運営を手伝った各凧組のメンバーや協会関係者、さらに学校の先生たちからも「とても良かった」と好評だったという。子どもたちが真剣に合戦に取り組む姿を見て、三条凧合戦の未来を感じた関係者も多かったようだ。地域全体で子どもたちを育てる場としての価値も改めて認識された。

協会関係者は「今後はもっと時間を長くとって開催したり、参加者を増やしたりして、さらに規模を拡大していきたい」と話す。この大会を毎年秋季大会の恒例行事として定着させることも目標の一つだ。より多くの子どもたちに体験の機会を届けることで、文化の継承をより確かなものにしていく考えだ。

次年度に向けては、今年以上の参加者を集めること、そして学校単位での参加をさらに増やしていくことを期待

している。また、今回参加した子どもたちが来年も再び出場してくれることも大きな願いだ。継続して参加することで、凧合戦の技術や楽しさをより深く体験できるに違いない。経験の積み重ねが、やがて本戦への挑戦へとつながっていく。

今、凧合戦で活躍しているベテラン揚げ師に聞くと、自身の幼少期には凧くらいしか遊びがなかったという。しかし、現代はそうではない。遊びは他にもたくさんあるが、その中から凧合戦という地域の祭りの一つを選んでもらいたい。合戦場の独特の緊張感、大人と同じような大きな声を出し、必死に相手の凧に向かい糸を仕掛ける。その一つ一つの体験が、子どもたちの記憶に強く残っていく。

そんな子どもたちの姿を見られたIKAGASSEN NEXTは、単なる子ども向けイベントではなく、未来の三条凧合戦を支える人材を育てる大切な場となりつつある。地域の文化を未来へとつなぐ、その確かな一歩がここから始まっている。

今年も9月19日、20日と三条凧合戦秋季大会にてIKAGASSEN NEXTを開催する。次世代の揚げ師の参加を心待ちにしている。



写真の紹介

- ① 初開催となった「IKAGASSEN NEXT」この中から未来の揚げ師、白法被が誕生することを願う。
- ② 選手宣誓をつとめたのは、三条越路組メンバーのお父さんをもつ東樹菜菜さん。
- ③ 今回の出場チームの中で一番小さい子供達が集まったチーム。まだ少し法被が大きい。
- ④ 太鼓の演奏の後に IKAGASSEN NEXT にも出場してくれた裏館小学校の児童たち。
- ⑤ 優勝したのはチームパープル、優勝の瞬間は両手をあげて大喜びしてるメンバー。



一ノ木戸小学校 が凧揚げクラブ を創部

令和7年度、三条市立一ノ木戸小学校のクラブ活動に「三条凧揚げクラブ」が創部された。

一ノ木戸小学校を含む三条市内数校に凧ばやしクラブはあるが、凧揚げをクラブ活動にするのは三条市内では初の取り組みである。現在（2026年2月時点）は凧揚げに興味を持つ4年生から6年生までの児童、20名ほどが活動を行っている。

創部のきっかけは一ノ木戸小学校が全学年で取り組む「だいきき♡三条ゆめプロジェクト」。地元の産業や歴史、地域の人との関わりをテーマに探求的・体験的に学習を深める。地域の人との関わりを通し、郷土愛を醸成し、地域の課題や児童自身の地域での生き方を考えることを目指している。その一つに三条の伝統でもある凧揚げが選ばれたのだ。

創部にいたり、今までなかったクラブ活動に興味を持った経緯や、凧協会の人からどのようなことを学び、地域の文化である凧合戦についてどのよう

な気があったのか、9月に行われたKAGASSEN NEXTに参加した創部1期生の6年生、5名に話を聞いた。

凧ばやしクラブ をキツカケに

「ここにいる5人のうち、4人が凧ばやしクラブにも入部しています。他の学年の子もそれがきっかけで入部してる人は多いです。僕はそれ以外にも入部した理由がありました。夏祭りの民謡流して凧囃子を踊ってる時に、一ノ木戸小学校の凧があつて。それを見た時、凧合戦があつたな〜って思いました。凧揚げも3年生の時に学年全員でやったし、合戦とかもやってるんだって思い出してクラブのアンケートを見て、入ったら面白そうかなと思いました」

そう話してくれたのは部長の星野さん。

3年時に行う凧揚げ授業は、凧合戦が開催される防災ステーションで学年全員で行うものだ。その時はグループに分かれ凧を揚げる体験をするが、本格的な合戦は行わないので凧合戦を間近に見る機会は少ない。



しかし、凧ばやしクラブに入部している児童は春の凧合戦で凧雛子の演奏を行うため、演奏後に合戦の様子を見る機会がある。そこで興味を持ったと話してくれた柳取さんは凧ばやしクラブの部長も勤めている。

筆者自身が話を聞く中で驚いたのは副部長の皆川さんの話だった。

「3年生の時に凧を揚げたり、凧ばやしクラブで合戦の日に行ったことはあったんですが、実は凧揚げクラブに入る前から三条凧協会の凧合戦の動画は観ていたんです。僕自身、興味を持ったことに挑戦したい気持ちがあつて凧

揚げクラブに入ったんですが、凧を揚げることすら難しく。大人のみさんがあんなに簡単そうに揚げているのがどれだけすごいことかわかりました」

三条凧協会の動画を小学生が見てるなんて正直、思わなかった。海外に行つて凧揚げしている動画や、血気盛んな凧合戦の様子を見て小学生がかっこいいと思つてくれている。

凧揚げ授業もそうだが、情報発信も含め凧協会の活動が子供達の心に凧合戦を根付かせていることにインタビュ어의冒頭でも感動してしまつた。

満を持して出場したNEXT

クラブ活動ではグラウンドで揚げ方を教えてもらったそうだ。まずは高く揚げるまでに糸を出して、引いて。安定させたら風の動きを見て糸をどちらに引くと凧がどう動くのか。大人でもこの操作の理屈を理解するにはだいぶ長いことかかるだろう。子供にはいささか難しすぎるのではないのかと思つた。糸を出し、引き上げた瞬間に凧が



グツと高く上がる瞬間が好きなんだと星野さんは笑顔で言う。

そして6月に満を持して出場した

KAGASSEN NEXT。

副委員長の関野山さんに合戦当日のことを聞いた。

「練習でたまたま糸が絡まつて合戦みたいになつたことはあつたけど、実際に合戦だけということとしてはなかつたからどうなるのか緊張はしていた。いざ合戦が始まつたら、凧揚げしてる時よりやるのがたくさんあつてワタワタしまつて。あつちに引け、こつちに引けとか糸の処理とか揚げてる時に

はないことばかりでした」

あまり風の強くない状況で揚げることにどのチームも苦戦したが、初めての合戦で何をしたらいいのか戸惑つ子供が多い中、凧揚げクラブの面々は大人からの指示を的確にこなし、どのチームよりも一致団結しているように見えた。

結果は2位。2回戦目の合戦終了間際まで必死で1位のチームに食らいついていたが、2点差で敗れた。

他のチームはカラとが使つてズルだって思つたよ！でも、僕たちは自分たちの力だけで引つ張つたから！と

口々に話す姿を見ると、半年間ほどのクラブ活動で大人顔負けのチーム力と、負けて悔しいと思えるくらいIKAGASSEN NEXTに真剣に取り組んだんだなと感心してならない。

みんなでやらないと勝てない

「メインで操作するのは一人かもしれないけど、籠を持つ人がいたり、最後に糸を引くときはみんなで一一致団結しないと勝てないんだなって思ったし、このメンバーで練習できたからこそ合戦で他のチームより上手に役割を果たせたと思う。でもまだ何をやるにも難しいことばかり。もっと練習したかった」

そう語った羽下さんは他のチームより自分たちはチームとしてのまとまりがあったと胸を張っていた。

来年も出場したいか聞くと全員が口を揃えて「もちろん！」と力強く言ってくれた。来年はどんな風揚げクラブになって欲しいかと尋ねると「もっと人数が増えて欲しいです。練習も楽しいけどやっぱり合戦の方が楽しいし、

今年のリベンジを新6年生や新5年生としたい。来年は絶対一位になりたい。自分の弟も来年4年生だから一緒にできたら嬉しい」と柳取さん。

中学生になると彼らは、きっと別々の部活動を選ぶだろう。それでも一ノ木戸小学校風揚げクラブのOBとして、来年はチームボブブラ学園として出場したいと熱意を見せる。中学生になってもクラブ活動をしているところに遊びに行こうかなと言っものもいた。

いつかこの風揚げクラブ出身者だけの新たな組ができるのではないかと思いを巡らせてしまう。

写真の紹介

- ① 今回インタビューに答えてくれた一ノ木戸小学校風揚げクラブ6年生のメンバー。創部一期生の6年生の中心人物たち。
- ② 風ばやしクラブとしても活動しており、三条市の伝統をしっかり継承してくれている。
- ③ IKAGASSEN NEXTでの成績は堂々の準優勝。順番に揚げ師を交代するチームプレイ。
- ④ 仲間と戦ったIKAGASSEN NEXT。彼らの誇らしい笑顔を見ていると、風合戦の伝統が繋がっていると確信できる。

④





名人揚げ師に

今聞いておきたい話 謙信組 長谷川 潔

平成15年に最高技術賞に贈られる白法被を獲得した謙信組 長谷川 潔さん。三条風協会会長の須藤さん率いる謙信組の創設メンバーでもある。長谷川さんの風のルーツは父親がやってきた下駄屋から始まる。

「親父がもとも下駄屋をしています。家には麻糸がたくさんあったので、小学生になったばかりの頃には、風を買ってもらって自分で麻糸を撚って風を揚げていました。小学校高学年にもなれば嵐南組のリヤカーについて会場まで歩いて行ったけど子供だったからね。合戦場に行っても見てることの方が多かった」

年月を経て、現在の謙信組の前身となる神田商会組に入組。神田商会組は金物屋の社員で構成された組であり、現風協会須藤会長の父親が勤めていた会社であった。そこからの誘いもあり入組。本格的に風合戦に参戦し始めたのは長谷川さんが26歳くらいからだった。風を揚げた経験はあるが合戦の経験はなく、この頃は言われたこと

をやるので必死だったと言う。

謙信組の誕生

須藤さんの父親が神田商会を退社したことをきっかけに昭和62年に神田商会組から謙信組に改名。謙信組の立ち上げは親族関係である長谷川家、須藤家のファミリーチームだった。

「私には兄弟が6人いて、男衆は合戦に入って、奥さんたちが協力して食事を準備してくれました。声がけして協力しながらやっと組の形を作ったよいうな感じですね。他人同士で作った組じゃないから良いことも悪いこともあったかもしれないですが、ここまでは残ってますからね。子供が大きくなればまた次の世代が育ってくるから謙信組は若い世代も多いですよ」

謙信組設立メンバーの孫世代が育ち、既存の組で20代の組員が5人もいる組はめったにない。風合戦は技術がなければもちろん勝つことはできないが、長く組を支えられる若手がいなければ組として存続することはできない。この若手の存在が数年後、謙信組の強固な地盤になるに違いない。

長谷川さんが最高技術賞を獲得した平成15年は謙信組は総合優勝こそ逃

したが、組優勝を受賞した。

「その年は須藤さんが会場だった三竹で凧を売っていたんだけどね。合戦してると気が揉めて午後から売り場をお母さんに任せて参戦してくれたんだ。予備場から持ってきてもらったものを私がかけてね。用意してた糸が本麻の糸で一回で5回も相手の糸切れたんだ。あれは自分でも驚いたね」

同じ凧で5回も相手の糸を切れればそれは名人の証である最高技術賞の白法被には充分すぎるほどの功績だ。長年、凧合戦に出ていると誰でももらえるものではないので、誇らしいですよね？と問うと総合優勝したわけでもなかったから自分でいいのかという気持ちがあったと長谷川さん。それでも組に名誉ある証を持ち帰れたのは嬉しいよねと語る。

大きく想いがこもったバトン

長谷川さんは県外で行われる凧協会の事業だけでなく、全国各地での凧揚げにも多く参加している。他地域の凧協会との交流や、各地での凧揚げの経験が三条凧協会との違いを知るきっかけにもなったという。

「三条凧協会のメンバーは若返ったね。どこの凧揚げの団体を見ても年齢のいつてる人ばかり。でも三条は40代くらいの人が役員を中心にあってからは海外にも行って、組も増やして、子供たちの凧合戦もやって。どんどん新しいことをしてる。そういう風にしていかないと簡単になくなってしまっからね、お祭りは」

隣県富山県射水市で行われていた越中だいもん凧祭りは令和7年開催を最後に46年の歴史に幕を下ろした。参加団体、担い手の減少や高齢化が大きな要因だったそうだ。各地の祭りで運営や担い手の減少や高齢化は直面している課題だ。

血気盛んな喧嘩凧として盛り上げてくれた先輩方からバトンを引き継ぎ、次世代の凧協会としての使命は三条凧合戦をこの先100年と続けていくこと。そのためには凧合戦って楽しいんだって思ってもらってまた来年も行ってみようって気持ちになってもういいから自分自身も協会の人たちと楽しい凧合戦にしていきたいと長谷川さんは優しく話す。

とても大きく、想いのこもったバトンを渡してくれる先輩揚げ師あってこそ三条凧合戦が長く続いてきた要因だと感じる。



写真の紹介

- ① 協会事業にも積極的に参加してくれる長谷川さんのご自宅には、須藤風屋さんの代々の図案や古い凧も飾っており、本当に凧が好きだとよく分かる。
- ② 最高技能賞を獲得した当時の写真。真紅の法被と帽子が若き日の名人の情熱を象徴している。
- ③ 平成15年、組優勝を受賞した時の謙信組の集合写真。謙信組の若手には神田商会組から引き継がれた水色の法被を羽織ってもらった。

三条市合併二十年 記念インタビュー 下田村羚羊会

2025年5月、三条市は合併20周年を迎えた。旧下田村・旧栄町が加わった新三条市が誕生した時は、小学生だった旧下田村出身の中川さんと今井さん。三条市街地の祭りである三条風合戦に下田村羚羊会として参加した理由を聞いた。

羚羊会は2022年、新組募集を行った際に加入した風組。旧下田村には風合戦の文化はあったのだろうか。下田村羚羊会組代表の今井将智さんに話を聞いた。

「下田村が三条市と合併したのをきっかけに三条祭りや風合戦を知りました。下田村のお祭りと言えば下田ふるさと祭りくらいしかないのが旧三条市のお祭りに参加するってことはなかったです」

下田村羚羊会のメンバーは今井さん、中川さんの同級生がほとんど。おそらくメンバーも風合戦に馴染みがあつた人はいなかっただろう。

今のメンバーは14名。風合戦に当日参加してくれるのはだいたい7名程

度というが、それが全員同世代だというのも驚きた。

下田村として風組を作らないかと声がかかった時、2人は一ノ木戸商店街でTREというカフェを運営していた。

下田村出身の若者が三条の市街地でやりたいことを実現させるという想いで立ち上げたカフェは、まちづくりの基盤となり、令和5年度「地域づくり表彰」で最優良事例である国土交通大臣賞を受賞。その他多くのまちづくり関連の賞を受賞している。

関係性を深めるのが祭り

地域で挑戦し、まちを動かしてきた2人にとって風合戦に参加するという意図を理解するのにそう時間はかからなかった。今井さんは「風合戦もそうですが、祭りってそもそも関係人口を深めるためのものだと思う。一つの目的に向かって、いろんな世代の人が集まってお酒を飲んだり、和気藹々と目的を達成する中で仲良くなつて関係性を深めていく。それがお祭りのあるべき姿なら風合戦という文化の中に下田村羚羊会というコミュニティ



ができれば新たな因子になるんじゃないかなと思っっています」。これまで馴染みのなかった風合戦にすんなりと溶け込んだ2人。それが実現できたのは、普段からまちづくりの一端を担ってきたという自負があるからなのかもしれない。

年に5回の同窓会

組員の中川裕稀さんは下田村羚羊会のあり方をまた別の視点でも捉えていた。風組を立ち上げるにあたり、中川さんが中心となって同級生をはじめとする年の近い下田村にバックグラウンドを持つ人に声をかけた。中川さんは社会人になってから同級生に会うことが少なくなっていたと日頃から感じていたという。風がきつかけで同級生と会うきっかけが増えるのではないかといい想いと、旧下田村の人が三条の祭りに出て新しい風合戦という形で盛り上げたいという点と点が繋がり、縁を感じたそうだ。

「同級生だとライブステージも一緒なので、ちょうどみんな子育ての時期なんです。男ってなかなか口実がないと集まれないので風の修理だから、練習だからと言って同級生の顔を見れる

ようになったのは嬉しいですね。年に1回だった同窓会が5回になっている感じですね(笑)」

楽しそうに語る中川さんは、新たなコミュニティの形成にも、既存のコミュニティの成熟にもどちらにも風合戦というものが不可欠だったという。

旧栄町の風組が待ち遠しい

下田村羚羊会の下田村という名称は行政などではもうほぼ使用されることはない。旧下田エリア、下郷などの呼称を使用する。インタビューした2人は小学校という多感な時期に自分の地元の名前がなくなるという大きな転換期を迎え、違和感や喪失感があったという。その謳われることのない下田村という呼称を名乗ることは合併でなくなってしまう自分たちの地元を思うプライドなのかもしれない。

そして今井さんは、「旧下田村は風組ができて、あとは旧栄町に風組ができれば本当の意味で新三条市としての風合戦になれるんじゃないかと思っている。栄町の組ができるのが待ち遠しい」と未来を見据え真剣な眼差しで語ってくれた。



写真の紹介

- ① 下田村羚羊会中心メンバーの中川さん(左)と今井さん(右)。2人もよく足を運ぶという下田の温泉施設いい湯らでいて話を聞いた。
- ② まだ結成してわずかな下田村羚羊会ではあるが、着実に実力をつけている。
- ③ 年に1度だった同窓会も風組を結成してからはことあるごとに集まる機会が増えた。大人になっても集まれる理由は貴重だ。
- ④ 今でも背中に「下田村」を背負い続ける彼らは本当に故郷想いの良い若者たちだ。





凧合戦を世界へ 海外事業で広がる 伝統文化の可能性

地域に根付く文化である三条凧合戦を海外へ発信する取り組みが、近年少しずつ広がりを見せている。凧揚げや凧合戦の披露だけでなく、太鼓演奏など新たな表現も取り入れながら、三条凧合戦の魅力の世界に伝える活動を続け、地域に受け継がれてきた歴史や文化を発信することで、伝統文化を更に先のステージへ進めようとしている。

海外事業のきっかけとなったのは、2022年に行われた日本とアゼルバイジャンの外交関係樹立30周年の記念事業だった。外務省と在アゼルバイジャン日本大使館から声がかかり、三条凧協会として現地で凧合戦を披露することになった。この事業を通して三条凧合戦が国と国との交流の中で役割を果たす可能性を示す、大きな転機となった。

三条凧合戦は昭和後期から平成初期にかけて、ハワイや中国などで凧揚げを披露したことがあるとも伝えられており、凧は海外でも通用する魅力を持ったコンテンツだと凧協会では以前

から感じていたという。言葉が通じなくても、空に舞う凧の迫力や、糸を絡めて落とし合う独特の競技性は、直感的に人々を惹きつける力を持っている。

コロナ禍での 海外渡航

「三条凧合戦は世界でも高い評価を得られる文化だという自信がありました。そう話す凧協会役員にとって、アゼルバイジャンからのオファーは大きなチャンスだった。当時は新型コロナウイルスの影響で海外渡航が制限されていた時期でもあったが、声がかかったときには迷うことなく参加を決めたという。その決断の裏には、「今行かなければ次はないかもしれない」という強い想いもあった。

このアゼルバイジャンでの活動をきっかけに、三条凧協会は海外での文化発信を本格的に進めていくこととなる。これまでの主な海外事業としては、2022年にアゼルバイジャンへ11人が渡航。続いて2024年には台湾へ19人、2025年にはタイへ14人が参加し、各地で凧揚げや凧合戦の

披露を行ってきた。それぞれの国で反応は異なるものの、共通して言えるのは「空を見上げる楽しさ」は世界共通であるという点だった。

さまざまな国を訪れる中で、特に印象に残っているのが最初の渡航先であるアゼルバイジャンだという。「アゼルバイジャンは、それまで聞いたことも見たこともない国でした。だからこそ、とても印象に残っています」。アゼルバイジャンではアジア人すら珍しいらしく、祭り衣装を身に纏った風協会のメンバーは現地の子どもたちからはまるでヒーローのように扱われたそうだ。未知の国で三条風合戦を披露するという体験は、参加したメンバーにとっても忘れられない出来事となった。

海外事業から 新たなコンテツ

海外事業を続ける中で、新たな取り組みも生まれている。その一つが太鼓演奏だ。2025年に訪れたタイでは、風揚げだけでなく三条風ばやしの太鼓演奏も披露した。

三条風協会では海外事業だけではな

く、市内外や県内外でも風合戦や風揚げを披露する機会が多い。しかし、風揚げには大きな課題がある。天候や風速に大きく左右されるという点だ。どれだけ準備をしても、風がなければ風は揚がらない。その不確実性は、海外事業では特に大きなリスクとなる。

「風合戦や風揚げは、天候や風速にとても左右されるコンテツです。そこで、天候に関係なく三条風合戦の魅力を伝えられる新しい表現として太鼓演奏を取り入れました」

風揚げはできるが、太鼓演奏などは初めてのメンバーばかり。全員で集まって練習できない時は各々が車の中や仕事場でも無意識に太鼓のリズムを刻む姿を何度も目にした。その積み重ねが、本番での一体感につながっていった。その後も、風協会の太鼓演奏は市内の団体から新年会で演奏を披露してほしいとオファーが来た。風協会としては風揚げ、風合戦以外の地域と関わる新たなコンテツの創出となった。

日本を代表して三 条風合戦を発信



凧合戦を海外で披露することによる波及効果も大きいと感じている。海外事業には現地に行く凧協会メンバーだけでなく、多くの関係者が関わり、応援する人も多い。なかでも大きな意味を持つのが、参加者自身の意識の変化だという。海外での経験が、次の世代の担い手を育てることにもつながっている。

「日本を代表して三条凧合戦を海外で披露するという体験を通して、より三条凧合戦への愛着を深めてくれることが最大の効果だと考えています。特に協会の若手メンバーにとつては、自分たちが地域文化を担っているという意識を強く持つきっかけにもなっています。海外事業に参加してきている若手の中から、将来この三条凧合戦を引っ張っていく人材が必ず出てくると信じています」

さらに、協会メンバーが力を合わせれば大きな事業も実現できるという手応えも得られた。海外遠征という大きな挑戦を経験したことで、協会としての結束もより強くなったという。参加者にとつても海外事業は特別な体験となる。長い移動や現地での準備を通して、メンバー同士のチームワークは自然と深まっていく。現地でのトラブルやハプニングは一生、笑いながら話せる

ネタに。そして何より、自分が生まれ育った地域の伝統行事を世界の舞台上で披露することは、誰にとつても大きな誇りになる。

世界中で三条凧合戦を披露したい

今後の展望については、さらに夢のある構想を描いている。世界中の名所で凧合戦を披露してみたいとのこと。

フランスのエッフェル塔の前や、エジプトのピラミッド、アメリカの自由の女神を背景に凧を揚げることができたらーそんな未来を思い描いている。その構想は決して夢物語ではなく、これまでの積み重ねの延長線上にある現実的な目標でもある。

どの国にも空と風はある。凧合戦は場所を選ばない文化だからこそ、世界中のさまざまな場所で披露する可能性がある。

三条凧合戦という地域の伝統文化は、今、少しずつ世界へと広がり始めている。その取り組みは文化の発信だけでなく、地域への誇りを育て、次の世代へとつないでいく力にもなっている。



④



③

写真の紹介

- ① 近年の海外事業の皮切りとなったアゼルバイジャンでの一枚。海外での反応の良さに手応えを感じている凧協会のメンバー。
- ② 新たなコンテンツとして始めた凧囃子の演奏。初ステージは2万人の大観衆。
- ③ 空と風があれば凧はあがる。凧を揚げてる表情は、老若男女、万国共通で笑顔だ。
- ④ 凧合戦披露 / 凧揚げ体験 / 凧囃子演奏と並び、凧の絵付け体験も人気コンテンツのひとつ。
- ⑤ 台北での打ち上げの一コマ。海外での経験は一生の話のネタになる。



⑤

特別協賛企業



株式会社 高儀

きれいな地球で暮らしたい。

TOYAMA
GROUP

外山産業グループ



ラマト工業株式会社

協賛企業

川口商事株式会社



遊楽楼 魚兵衛

YUKIRO DOHYO
since 1868



六角巻
扇

SUDO IKAYA
SINCE 1887

新潟県伝統工芸品認定品

須藤 風屋

六代目 須藤 謙一

〒955-0081
新潟県三条市東裏町2丁目-16

TEL : 090-3223-3243

HP : <https://sudokaya.jp>

●お客様のご要望にお答えします。ご相談ください。

私たちのステージは世界。
卓越した先進の技術でお応えします。

SANJO

株式会社 三條機械製作所

〒959-1151 新潟県三条市猪子場新田1300番地
Tel 0256-45-3131(代) Fax 0256-45-5017

www.sanjokikai.co.jp



インターネット・ケーブルテレビ・電話

NCT

0120-080-009

www.nct9.co.jp



NCTコネクト配信中!!



お客さまの
笑顔のために

さんしん 三条信用金庫
http://www.shinkin.co.jp/sanshin/



COPPER 100 HOME WARE

新光堂



自動車工具 & 船用金物

三洋産業株式会社

新潟県三条市上土2丁目1-36

あなたの暮らしに、*fu fu fu* ♪



ファミらいふ

LIKE A FAMILY HEART

株式会社 田中製 ファミねっと かりん
シルバーマンション アメニティ・オアシス駅南



物 品 協 賛



CAPTAIN STAG

Sanjo Graphic & Media Supporting
onsatsu 三栄印刷株式会社

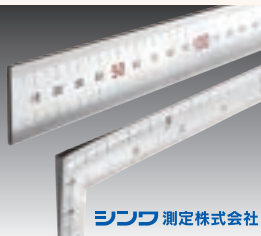
川口工器株式会社



ヤマモト工業株式会社



Work Together



シンワ 測定株式会社

超抗菌 銅繊維フィルターマスク
× 銅繊維を編み込んだ次世代マスク

高3条の最新技術

ホームページ QRコード

株式会社 ナカヅカ・リコー
〒955-0081 新潟県三条市東裏2丁目17番15号
TEL:0256-34-5121 FAX:0256-35-6020

祝 令和8年度 三条風合戦

作業用工具・理美容具製造メーカー

株式会社 マルト長谷川五作所
MARUTO HASEGAWA KOSAKUJO INC.

〒955-0831 新潟県三条市上土 16番1号
Tel. 0256-33-3010 / Fax. 0256-34-7720
https://www.keiba-tool.com

KAKUMI

野崎貴実税理士事務所

皇室御用上(第22回)機械旅行傘
第19回全国菓子大博覧会・高松宮御機織受賞

六角扇サブレ





株式会社
オールペイント コグレ

ツルタポルト株式会社

祝 三条風合戦

新潟の地を通信で結ぶ

藤島無線工業(株)

本社(長岡)・新潟営業所・三条支店
<https://www.fmcc.co.jp>

中山鉄工所

中山 隆

〒950-0001 新潟県三条市西大塚1丁目2番12号
TEL (0256) 38-5284
FAX (0256) 38-4112



日本料理



m moisteane

株式会社モイスティーナ 燕三条販売



私たちは三条風合戦を応援しています



研削研磨のバイオニア

FUCHIOKA

SINCE 1918



SANJO JAPAN
Since 1939

有限会社
イクマメタルワークス



株式会社 FreeDomCompany

旧車&昭和レトロ
KYOWA
クラシックカー
&ライブステーション

三条風協会では協賛企業を募集しています



発行日：2026年4月20日

発行：三条風協会

編集：三条風協会 企画広報部

住所：新潟県三条市東裏館2丁目2-16

TEL：080-4057-1012

URL：<https://www.ikagassen.com>

印刷：株式会社フリーダムカンパニー

編集後記

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。イカマガジンもお陰様で3周年を迎えることができました。毎回発行する度に考えていることは、この三条風合戦の伝統文化をどうやって後世に残していくのかということです。答えは、きっとシンプルで誰かがやるのではなく、現役の私たちがバトンをつなぐしかないんだと思います。イカマガジンは私たちが繋ぐ大事なバトンの一つなんです。

イカマガジン2026年号 二〇二六年四月一〇日発行

編集・発行 三条風協会企画広報部

Tel. 080 (4057) 1012



株式会社 高儀

きれいな地球で暮らしたい。

TOYAMA
GROUP ●

外山産業グループ



ラマト工業株式会社